君と世界ともう一人

舞川琴奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と世界ともう一人

【Nコード】

N5928I

【作者名】

舞川琴奈

【あらすじ】

変わらない日常を持って余して夢に耽っていた私は、ある夜猥と出会った。

全身鏡と猥で変わらない日常が少しずつ違って見え始めた。見え始めた日常のなかで、私は本当のことを知る。

そして私は大切なものを失うことになる。

猥は変わることが必ずしも良いことではないことを教えてくれた。

世界がどんなにかわっても、私は獺のことを忘れない。

江藤桃、高校二年生、忘れられない冬が始まる。

私と美紀と狛田君（前書き）

はじめまして。

舞川琴奈といいます。

はじめて書くのに連載小説とかやっちゃった感じですが、温かく見守ってくれると嬉しいです。

誤字・脱字・この文解読不明などの箇所がありましたら申し訳ないです。

それでは、結構鬱なお話ですが、読んでいただけたら嬉しいです。

私と美紀と狛田君

そういえば、いつの頃からだろう。

朝が来て、目が覚めて、どうしてずっと夢の中にいられないんだろうと思うようになったのは。

いや、普通に考えて、夢の中にずっといるってことは限りなく生から遠ざかっている状態だということとは分かる。

これでも一応義務教育ははたし、来年は大学受験を控えている身なので。

でも夢だつてそれほど面白いわけではないのだ。

精々、ジェットコースターに乗ったり、お金を手にしたりする夢を見ている時の自分のテンションが上がっているだけで、目が覚めると壮絶に虚しくなるだけだ。

けれど、日常と夢を天秤にかけたら最速の速さで夢を選ぶ。

携帯のアラームを止める。また目覚めてしまったと、日課のごくおもいながら、むっくりおきる。

起き上がるときベッドがキィィと音をたてた。

最近この音が耳障りで仕方ない。

やせなきやなあとまた日課のごくおもいながら洗面所に向かう。

顔を洗って制服に着替えてご飯を食べる。

変わらない毎日だなあとありきたりなことを思う。

お母さん、たまにはオムレツかスクランブルエッグにしてよって前言ったの忘れてるな。

黄身が固まつてる目玉焼き。

あんまり好きじゃないけど言ったら文句いわれるから黙って食べる。

「桃、早く食べなさいよ。テレビ見てる暇あるのあんた。次美紀がご飯たべるんだから席あけて」

「椅子四つあるんだからいいじゃん」

美紀が長い髪を二つに結わいてテーブルにきた。

「急かさないとお姉ちゃんはいつも遅いから言ってるんだよ。」

美紀が斜め向かいの椅子に座る。

「それにね、椅子は普通四脚って言うって室橋先生が言ってた。」
勝ったといわんばかりに偉そうに言う。

まったくこいつもかわんねえなと思いつながら席をたつ。

「あつお姉ちゃんご飯残したー。」

「美紀ちゃんはお姉ちゃんよりすぐーく頭が良くてとーっても偉い子なんだからお姉ちゃんのこと反面教師にして精々ご飯残さず食べなさい。」

はんめんきょうし。何だそれ。みたいなポカンとした顔をうかべて私のことを見る美紀。

早くご飯を残さずかつこんで学校に行つて室橋先生とっ捕まえて反面教師の意味でも聞いてみな。

口の周りを洗おうと思つて洗面所にいったら鏡の前にさっきの美紀と同じ勝ち誇つた顔をした私が出た。小学四年生相手に何意地悪してんの私。

美紀が私に向かって生意気な態度をとることもいつも何も変わらない。大体私に対して素直で優しい美紀なんて想像しただけで吐き気が出る。

今日もバスに乗って学校に行つて、同じ調子で話す現代文の授業は寝て、昼休みはなつぐと一緒に弁当を食べて・・・またお母さん、ふりかけは袋ごと入れないで家でかけてつて言ったの忘れてる。もういいや、かけないで。

なつぐはしゃげのふりかけを持って余してる私のこともおかまいなしに携帯をいじってる。

また彼氏かと思いながら、お互い無言でご飯を食べる。

ちよつとしてそれに少し気が引けて、くちを開いた。

「ともくん、元気？」

なつぐはようやく私のほうを向いた。今日目を合わせたのはじめてなんじゃないか。

「うん。多分元気。」

多分ってなんだ、多分って。彼氏のことでしょ。隣のクラスなんだししょっちゅう会ってるのに多分って。大体隣にいるなら今メールするなよ。

「ってか12時にメールくれなかつたでしょ。」

「は。何が？」

開いていた携帯を閉じてクスクス笑いながらなつぐは言った。

「今日記念日。あたしと智樹の。」

どうしていちいち記念日を祝えって軽く強要してくるんだなつぐは。

この子も中学の時から、いや、小学生の時から変わってないな。

大体なせ一ヶ月ごとに祝う必要があるんだろう。そんなに二人の仲はいまにも千切れそうなほど危うい系の様なものなのか。

やったね、すつごく危なかつたけど私たち無事に三ヶ月をこえることができたね。

なにそれ。嘆かわしい。

「おめでとうございまーす。記念にこれあげるよ。」

なつぐにしゃけのふりかけを渡す。いや、いらないしと返される。

「もうー、桃に彼氏ができても祝ってやんないからね。」

なつぐはまたけたけた笑いながら言う。祝ってくれなくて結構です。そんなEfの話残念ながら高校のうちで実現するとは思えないし。

「桃って自分の記念日ですら忘れそうだよね。」

私もそう思う。

女子が記念日を大事にすることもいつの時代も変わらないことの

一つなのかなって思いながらお弁当箱を閉じた。

午後の授業が終わって、部活に行つて、またバスに乗って帰って、いつもおんなじ。

ほんとに変わらない。バスから見える景色も、座席のすわり心地も、決まった停留所で私立の可愛い制服を着た小学生が乗り込んでくるのも。

日常の細かい変化なんてたくさんあることは分かっている。

気づけば街路樹は葉を失つて、見ているこつちが寒くなるくらいに丸裸に風を浴びているし、もうマフラーをつけている人が多くなってきた。

でもそれを見つけたとしたって、そうだよな、もう11月も中旬だしなと納得して終わる。

それ以上でもそれ以下でもなく、季節は移り変わっていくものだと分かっている。

分かっているものを取り立ててありがたがるほどでもないように思えてきてしまった。

それならもつと日常の中に変化はないんだろうか。

だけど何も変わらないことに私は不満を持っているわけじゃない。ただそんな変わらない毎日でも気に留めなくらい考えられること、夢中になれることを私はさがしてるんだ。

つまり刺激が欲しい。

それがないから、変わり映えのない毎日、むしろ変わる必要のない日常をひとつひとつ細かく拾って変わらないなあということしかできなないんだ。

だから、そんなに日常と変わらない、大して面白くもない夢のなかに逃げてしまいたくなる。

ジェットコースターが今にも落ちる時のあの高揚感に虚無が含まれている感覚、知らないおじさんから小銭をたくさんもらってなにを買おうかどきどきしながら考えている気持ち。(でもなんで夢の中

でまで小銭なんだろう。) そっちのほうはまだ私にとって夢中になれるのは歴然だった。たとえ目覚めたときにどんなに虚しくとも。

「お姉ちゃん邪魔なんだけど。どいてくんない。」
「あーはいはいと身をかわす。」

ソファはまだ一人掛けが二つあるのに、なんでわざわざ私の二人掛けの方にくるかなと思いつながら一人掛けに移動する。

美紀は空いた二人掛けの広々したソファに不服そうに腰掛けた。何が不満なんだお前。

美紀は私のことを口先ではお姉ちゃんとのたまって、腹の中では呼び捨てにしているか、こいつ呼びわりでもしているか、ももんがとも呼んでいるのかなと思うと笑えてきた。(実際なつぐにそう呼ばれていた時期があつたし、いまでもたまに呼ぶ。)

「お姉ちゃん、今日室橋先生に反面教師の意味聞いてきたよ。」
笑いそうになってきたところに、美紀がそんなことをどうだ参ったかももんが！とでも言わんばかりに喋るから危うく噴き出しそうになってクツションで口元を隠した。

美紀は私にどんなに悪態ついてても、どんなに偉そうにものをいっても、所詮子供^{ガキ}だ。
変なところでも素直。

そんなこと馬鹿正直に言った本人に言うなよ、お姉ちゃんもう意味知ってるから。

「そうか、美紀はまた一つ賢くなって良かったね。でもあんたが知らなくて私が知ってる四字熟語はあといいいくつあるんだらうね。」

笑いをこらえて、落ち着いていた口調でそう言った瞬間、美紀は私をヤのつく人顔負け並みに睨んできた。

まあ、ヤのつく人を実際見たことはないから想像だけ。

「ちよっとテーブル片付けてー。ご飯できたからもってってー。」

はーいと睨む美紀を後にキッチンへ向かう。

「ねえお母さんさ、お弁当、またふりかけ袋のまんまいれたでしょ。かけてって言ったじゃん。」

「そうだっけ？わかった今度からそうする。」

明日からしてくれると助かるんだけどな。

美紀も手伝いなさいとお母さんに言われて仏頂面でのそのそ美紀が来る。

お味噌汁をお母さんが注いでる間、美紀は薄暗い廊下をじっと見ていた。

「お母さん、あのダンボール何？」

二人分のお味噌汁を持った私は美紀が言ったダンボール？と思って廊下を見た。

帰ってきたときは気がつかなかった、靴箱のすぐ隣に美紀の身長より少し小さいくらいの長いダンボールが置いてあった。

「全身鏡。」

全身鏡。お父さんの部屋にある大きな鏡が。

美紀は耳に入ってきたぜんしんきょうという音を頭の中でようやく漢字に変換できたところみたいだ。

ご飯をよそいながら、お母さんは続けた。

「桃、ちよつと前に部屋に置く大きい鏡が欲しいって言ってたよね。今日二トリで買ってきたの。」

・・・え？私か？そんなこと・・・言っただけ。

記憶を呼び起こす。全身鏡。全身鏡。・・・ちよつと前っていつだお母さん。

今日は十一月の十三日、なつぐの三ヶ月記念日・・・あっ！

そうだそうだ、思い出した。ちよつと三ヶ月前なつぐが市川智樹君と付き合った日、なつぐが全身鏡を買ったら彼氏ができたと言って私が爆笑したんだ。

「ちよつ・・・それ言ったのぴったり三ヶ月も前じゃん。なんで今更。」

「いらぬならお母さん使っけ・・・」
「いります。」

十六年と九ヶ月、やっとお母さんのことがわかった。

お母さんは忘れてるんじゃないやなくて、ものすごい時間差攻撃をかましてくるんだってこと。

それならふりかけは先月くらいから言ってるけど、ちゃんとご飯にかかって出てくるのは来年の一月か。

・・・もういい。自分でかける。最初からそうすればよかったんだ。でもいま考えると恥ずかしすぎる。全身鏡なんかで彼氏ができたら苦労しないっつーのって思いつきりなつぐに笑ったのに、私何お母さんに頼んでんの！

美紀がお姉ちゃんだけずるいとお母さんに抗議するけど、お母さんはあんた鏡なんて見ないでしょと美紀にご飯茶碗を渡す。

美紀は見るもん！と子供特有の否定されたら必ず肯定するお決まりのやりとりをかわす。

テーブルの上にお味噌汁の茶碗を置いて、全身鏡かあ、どこに置こうかと考えていた。

気づいたら私は校舎の一番上、行ったことのない屋上に来ていた。漫画でよくある、屋上でお昼ご飯とか、密会とか、サボりとかは現実到底ありえないことだ。

それでなくてもちよつとしたことで頭を抱える年代、暗く病みきった社会の中で生きている高校生はふとしたことで身を投げてしまふ。

その抑制のためか、ただ単に危ないからか、ここは重く閉ざされていると思っていた。

何でここにいるんだろつ。

空は曇っていた。けど、晴れていた。

私はいつの間にか手に持っていた錆びた鎖を思いきり振り上げた。振り上げた瞬間、後ろから中学の時同じクラスだったことのある狛

田君がやってきた。

どうしてきたと分かるの。

それは私が見ているから。

どうして狛田くんだとわかるの。

それはなつぐが彼を好きだったから。

なつぐが？

ちがうでしょう。

お姉ちゃんが好きだったからでしょう？

狛田君が美紀になっていた。

「……。」

目が覚めて良かったと、いつもと真逆なことを思いながら体を起こした。

携帯の画面を開く。四時二十三分。

久しぶりに訳の分からない気持ち悪い夢を見た。

汗ばんでる体に、風を送るようにしてパジャマの首元を掴んでパタパタする。

「くそ美紀・夢でまで偉そうに喋りやがって……。」

美紀にはなんの罪もないけど今はものすごく美紀が憎くてたまらなかった。

ふうと呼吸を落ち着かせると部屋の隅にある全身鏡に目がとまった。

「ねえ」

耳に少し低くて暗い声が聞こえた。

空耳空耳と決め込んで布団に潜り込む。

「シカトしないでよ」

やばい。今汗が滝のように流れてる。私まだ夢見てるのかな。

・・・これが幽・・・

「私は獾^{バグ}」

「・・・っ・・・」

「大きい声出さないで。まだみんな寝てる。」

やばい。怖い。何これ、何なのこれ。

すぐ目の前に私とおんなじ姿かたちをした男の子が座っていた。

獾といった男の子は優しく笑いながら私を見た。

「桃は狛田君が好きなのか。」

私は震えていた。気づくと涙があふれていて布団にポツポツと音を立てて零していた。

お願い、早く目が覚めて。

「覚めないよ、これ現実だから。」

「現・・・実・・・。」

獾は私の左手と彼の右手を重ねた。

ひんやり、冷たかった。

部屋の中の全身鏡が、私を見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5928i/>

君と世界ともう一人

2010年10月17日05時48分発行